

「中国語学科の学生募集 「台湾ブランド」を打ち出す」

パンデミックが収まってしばらく経ち、このバンビたちはまた奈良公園でもっとも注目を集める存在になってきています。各国の旅行客はそれぞれに写真を撮ったり餌をあげたりしています。ただ、こちらの先生と学生の目的は鹿ではなく、人です。

(写真撮影、お手伝いしましょうか?)

(いいんですか?よかった!みんなで撮ってもらっていいんですか?)

(いいですよ)

(ありがとう)

(1、2、3)

(ありがとう)

(写真撮りましょうか?)

(はい、ありがとう)

中国語を話す人を見つけて積極的にお手伝いをしているのは、今年大学二年生の木田珠妃さん。奈良にある天理大学外国語学科中国語専攻の学生さんです。奈良出身で、台湾で学んだことがあります。

(先日、台湾から帰ってきました)

(どこに行ったの?)

(中国文化大学で20日間ほど学びました)

(20日で中国語がよくできるようになったんですね)

(ありがとう)

広く見渡すと、奈良公園全体の8割が中国語を話す旅行客で占められています。中華圏の人々の世界的な影響力が日増しに高まる中、木田さんが通う天理大学でも外国語学科中国語専攻を中国語学科へと昇格させることにしました。学生募集のポスターを見ると、広報のメインは中国ではなく、メインビジュアルが「バイクの滝」であるばかりでなく、「台湾」をとことん学べる大学ということが強調されています。

「深く、「とことん」台湾を教える」

(ここが中国語学科の共同研究室です。どうぞ。)

共同研究室に入ると、台湾の要素にあふれています。各種台湾研究の本や雑誌だけではなく、台湾雑貨がちりばめられています。野球のユニフォームもありました。

(これは今年台北で実施した語学実習のときに、自分で買いました。)

(こちらの熊もですか?)

(これは台湾の友人がプレゼントしてくれました)

主任の首元には注音符号のネックベルトもかかっていました。

(中川先生、日本語)

日本でもっとも台湾のことを研究できる大学をうたっていますが、いわゆる「とことん」理解するとは、どのように実現されるのでしょうか?

注音符号、繁体字、台湾語は基礎にしかすぎません。

(ここが私の研究室です)

(先生の部屋の入り口には OPEN ちゃん飾られているんですね)

(そうそう、台北で買いました)

山本和行教授の研究室に入ると、各種の歴史書や雑誌が書棚にずらっと並び、まるで小さな図書館のようです。山本氏の専門は台湾史で、中央研究院の訪問研究員だったこともあります。彼は台湾を深く理解するためには、歴史から学ぶことが必要と言います。

(山本、日本語)

カリキュラム上は台湾の歴史的な事件、たとえば、日清戦争、霧社事件、228 事件、白色テロ、美麗島事件、総統直接選挙など、すべて計画の中に入っています。

(山本、日本語)

「宗教的淵源、台湾文化研究の先駆け」

天理大学が台湾に特別な関心を寄せるのには、理由があります。

(井手さん、日本語)

ここは建設から 100 年が経過した古式ゆかしい神殿で、天理大学の原点です。

日本唯一の宗教都市、天理市の信仰の中心でもあります。

毎日、信者さんたちが自発的に床を拭く様子が見られます。

(私たち天理教の教えでは、私たちの身体は親神さまが作ったものであるのです、こうして感謝の気持ちを持っています。こうして「ひのきしん」をすることは、中国語で言う「聖勞」にあたります)

日本の植民地統治時代、天理教は海を渡って台湾で伝道を行うことで、このような関係が生まれました。政権が変わっても、民間の文化交流は変わらず途切れませんでした。

そればかりか、天理大学の文化研究会は台湾研究の先駆けのひとつとなりました。

(下村先生、日本語)

「中国語圏を眺め、台湾がハブになる」

今となっては、文学、教育、政治、社会の内容を収録した学術雑誌は、台湾と日本の研究者たちの重要な参考文献となっています。

数十年にわたる学問的な蓄積は、天理大学が中国語学科を成立させる基盤として、「とことん」台湾を学べることにつながります。

(今井先生、日本語)

台湾ブランドを打ち出して学生は集められないということはなく、台湾らしさは中国語学科の特色だと考えています。

古都奈良に立脚した、日本と台湾の学術交流が続いています。